



館長だより

山形県産業科学館

令和6年10月8日(火)

発行 館長 加藤 智一

宥座之器（ゆうざのき）



3～4年前になるだろうか、栃木県足利市にある国指定史跡「足利学校」を訪れたときのこと、「宥座之器」という、今で言うところの「学習教材」を目にする機会がありました。何の「学習教材」？「論語」です。簡単に言うと、「子曰く……」で始まる孔子の教えをまとめた教科書です。「論語」は、道德規範や倫理観と深く関わりのあるもので、中国から伝わりました。古くは応神天皇（西暦 390 年頃）の時代に漢字や仏教と一緒に伝わり聖徳太子や空海なども論語を学んでいました。足利学校は、日本最古の学校

として有名で、歴史に名前が登場するのは室町時代中期ですが、実際に建てられたのはもっと前と考えられています。奈良時代に、国学を学ぶ施設として設置されたとも、平安時代前期の漢学者・小野篁が創建したとも、鎌倉時代に、足利義兼が子弟教育の場として創建したとも言われていますが、足利義兼は、平安時代後期から鎌倉時代前期の武将なので、遅くともこの頃には存在したと考えられています。そして、足利学校が最も隆盛を極めたのが、室町時代の中頃、関東管領の上杉憲実が、学問振興のために足利学校を整備したことによります。憲実は、学長として鎌倉から僧を招き、儒教五経のうち四経の注釈書を寄進するなどして、足利学校を発展させました。また、憲実の息子や孫も書を寄進して、学校の発展・保護に努めます。関東地方で「最高の学府」となった足利学校には、全国から学生が集まり、なかには沖縄から来た人もいたそうです。さらに、足

利学校が栄えた理由はほかにもあります。当時は、各国を治める武将たちが、実戦で役に立つ人材を求めています。足利学校では戦に使える易学・兵学・医学なども教えていたため、卒業生が軍師として召し抱えられることも多かったようです。

そんな足利学校で教えられていた「論語」の中に、「宥座之器」という教材が登場するのです。「宥座之器」とは、自らの戒めとするために身近に置いてある道具のこと。「宥坐」は身近や身の回りという意味です。どんな物か言うと、写真の通り、「水が入っていない空の時は傾き、水を適度に入るとまっすぐに立ち、水が満ちるとひっくり返り全てこぼれる」と代物です。これを見た孔子は「知を持つものは愚を自覚し、功績を持つものは謙譲の心を持ち、力を持つものは恐れを忘れず、富があるものは謙遜を忘れずに正しい姿勢を保て。」と説いたそうです。これを「中庸の教え」と言います。

中庸の大切さを説く故事成語で、「足るを知る」とか「過ぎたるは及ばざるがごとし」にもつながる教えだと思えます。

この「宥座之器」、作れますよね。紙コップなんか利用して、「中庸の教え」を伝えるワークショップを企画したら如何なものでしょうか。

